

日本の心理学関連分野における青年期の性行動に関する研究の動向と展望

：青年期女性の性行動の特徴に着目して

森 裕子 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

石丸 径一郎 お茶の水女子大学基幹研究院

要約

本研究では、青年期の性行動について日本の心理学関連分野における知見を概観し、その展望や課題について述べ、さらに、性行動について新たな様相がみられた、青年期女性の性行動に着目して考察する。81本の論文を分析対象とし、「衛生と性教育」「出産や家族」「逸脱と性暴力」「恋愛」の4領域に分け、それぞれの領域について考察した。その結果、性行動について話題にするとということそのものに抵抗が存在することや、性行動が特有の文化的な意味を持つこと、性行動の背後に性規範が存在すること、性行動を男性と女性の相互作用として捉える必要があるという示唆が得られた。また、青年期女性の性行動の特徴として、受動的である、男性との相互作用によって影響を受ける、他の女性との相互作用によって影響を受けるという3つがあげられた。

キー・ワード：性行動、性的欲求、セックス、青年期

I 序論

1. 近年の性行動について

90年代前半から2000年代前半にかけて、青少年層全体で性行動の活発化がみられたが、近年では、一転して多くの性行動において経験率の低下がみられ、青少年の性行動が不活発化していると指摘されている(日本性教育協会(2019)など)。しかしこれは、90年代や2000年代の性行動が非常に活発であり、20~30年前の水準に戻ったともいえる。加えて、男女差や群間差が大きくなっていることも指摘できる。1990年代以降、性行動における男女差が縮小していたが、2000年代生まれではそれ以前の世代と比べてデート、キス、性交経験において女子先行の状況が際立っている(林、

2019)。また、女子では性的な事柄に関心がなく、経験もない者が増加し続けているが、関心はないが経験はあるという者も増加している(林、2019)。このことから、青少年の性行動は不活発化しつつも分極化が進み、性行動や性意識における性差が顕在化し、一部の層における性行動が低年齢化しているといえる(林、2019)。

そこで、本研究では日本の心理学関連分野における青年期の性行動についての知見を概観し、その展望や課題について述べる。さらに、性行動について新たな様相がみられた、青年期女性の性行動に着目して考察する。

II 分析対象とその概要

1. 分析対象

j-stageにおいて、「性行動」で検索すると4409件、「性行動 心理」では1600件、「性的欲求」で検索すると311件、「性的欲求 心理」では187件、「セックス」で検索すると1514件、「セックス 心理」では607件、「性行為」で検索すると2465件、「性行為 心理」では703件、「性的欲求」では311件、「性的欲求 心理」では187件がヒットした。その中から、議事録やシンポジウム、ポスター発表などを対象外とし、また本研究に直接関係のないものを除いた81本の論文を分析対象とした。

本研究の対象外とした論文には、高齢者や中年など青年期以外の性行動を検討した論文や、疾病などによって性生活に障害がある者の性行動について検討したもの、ジェンダー・アイデンティティや性役割といった性に関する構成概念を測定するために、性行動に関する項目を含んだ尺度を作成し、信頼性・妥当性などを検討した論文などが含まれた。

2. 分析対象の内訳

まずは、分析対象とした81本の論文が発表された年代について図1に示す。90年代から2000年代にかけて、多くの論文が発表されたことが分かる。

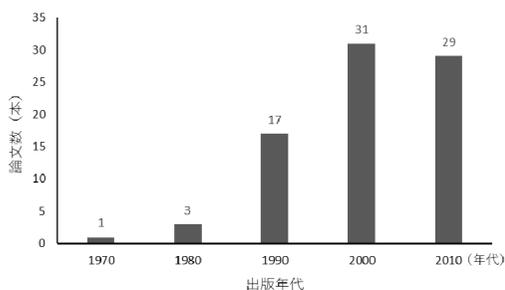


図1 分析対象が発表された年代について

3. 分析対象の分類

分析対象とした81本の論文は、「衛生と性教育」「出産や家族」「逸脱と性暴力」「恋愛」の4領域に分類することが出来る。これら4領域の分布を表1に示す。

表1 分析対象の分類

分類	本数 (本)
衛生と性教育	25
出産や家族	19
逸脱した性行動	23
恋愛	14
計	81

「衛生と性教育」には、小中学校や高等学校において、どのような性教育が有効なのか、生徒・児童の両親がどのような性教育を家庭・学校において必要としているかなどの性教育に関する論文や、エイズなどの性感染症を防ぐためのコンドームの使用に対する態度や感情を検討した論文が含まれる。

「出産や家族」には、家族観や生殖をめぐる意識などを検討した論文と、人工妊娠中絶や流産など妊娠中のトラブルをめぐる変化や反応を検討したものや、妊娠中や出産後の夫婦の性生活を検討したものなど、妊娠・出産に関わる論文が含まれる。

「逸脱と性暴力」には、非行少年や援助交際を行う女子高生などのセクシュアリティについて検討した論文や、夫婦間の性暴力や大学におけるセクシュアル・ハラスメントについて検討した論文が含まれる。

「恋愛」には、大学生などの青年期における恋愛に影響を及ぼす要因などを検討した論文や、夫婦関係に対する妻・夫の考えを検討した論文が含まれる。

以下では、それぞれの領域における知見をまとめ、最後に今後の課題や展望について、また青年期女性の性行動の特徴について考察する。

Ⅲ 各領域における知見と課題

1. 「衛生と性教育」における知見と課題

「衛生と性教育」の領域には、性教育に関する論文と、衛生に関する論文が含まれる。衛生に関する論文では、コンドームの購入や使用に対して、影響を及ぼす要因を検討するものが多い。樋口・中村(2009)は、大学生のコンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情およびその発生因の検討を行い、男性は周囲への適切な振舞い方が分からないことから、女性は購入行動を行うことは自己像の不一致を喚起するということから、羞恥感情が発生していることが分かった。また、コンドームを使用・使用を交渉する際は、男性は他者からの好ましくない社会的評価への懸念から、女性はその場面における振舞い方が分からないことから羞恥感情を引き起こされていることが分かった(樋口・中村, 2010)。さらに、これらコンドームの購入や使用に関する行動について、健康行動の獲得に至るまでのプロセスを示す理論的枠組みである変容ステージを用いて、羞恥感情との関連について検討を行ったところ、コンドームを実際に購入している人は購入していない人に比べて、コンドーム購入時にあまり恥ずかしさを感じていないという結果が得られ、羞恥感情がコンドーム購入の実行を阻害する大きな変数の一つであるというこれまでの知見と一致した(樋口・中村, 2010)。

コンドームの使用では他に、性感染症予防に対する意識や行動意図が、コンドーム使用の有無を予測し(尼崎・清水, 2008)、性感染症の予防に対する行動意図を高めることで、コンドームの使用行動が促進する可能性も指摘されている(尼崎・森・清水, 2011)。具体的には、コンドームの使用行動に対する自己効力感を高める健康教育などが有効であると考えられる(尼崎・森, 2011)。

しかし、大学生と保護者でエイズや性感染症に対する知識に差はなく、保護者自身の知識も十分ではないことが分かり、保護者に対する性教育の必要性も指摘されている(武富他, 2003)。

一方で、コンドームの使用を抑制する要因として、特に女性では性行為人数が大きな影響を及ぼしていることが明らかになっている(山崎・木原・木原, 2005)。女性においては、性行為人数が多い方が少ない方より、コンドームを使用していないという結果が得られた(山崎他, 2005)。コンドームを使用しない女性は、膣外射精や膣内射精によっても、自分が妊娠しなかったことに基づいて、独自の避妊意識を形成し、コンドーム不使用を定着させることが分かった(山崎他, 2005)。女性に特有の子宮頸がんは、性行為によって感染するウイルスが主な原因であることが分かっている(小林・朝倉, 2013)ことから、予防効果の高いコンドームを正しく使用することは重要である。また子宮頸がんは、ワクチンを接種することで予防できるが、女子高生の予防ワクチン接種には、母親の意見や、時間や場所を工夫するなどの問題解決に向けた調整力が影響を及ぼしている(小林・朝倉, 2013)。

性教育に関する論文には、学校における性教育と家庭における性教育それぞれの問題点や課題を検討したものが含まれる。

学校における性教育では、文部科学省が学習指導要領(2017年)において、「性教育」としての科目設定はしておらず、道徳や理科、保健体育などの授業で性に関する内容が適時、扱われている状況であり、学校によって差が生まれている(中村・佐藤, 2006)。また、系統的なカリキュラムが存在せず、現在の性教育はセックスに関する医学的知識の提供が中心になっている(村木・大東・青木, 2011)。そのため、心の結びつきに関する内容が不足しており、人間関係構築に関する教育が不十分であるため、科学だけでなく人格にも焦点を当てた性教育を行う必要があること(長谷川,

1992), 家庭科の教科書では女性のライフコースを自立か結婚かのように対立的に描かれていること(菊沢・中村・福田, 1983)などが指摘されている(竹原・三砂・本田, 2006; 村木他, 2011)。

さらに, 性別によって性教育の内容や学習の程度に差がみられ, 養護教諭の多くが女性であることや, 女性の身体と生殖との関連は意識されやすいこと(猪瀬, 2010)などから, 女子偏重の性教育が行われている(劔・山本・松田, 2002)。それにより, 男子は正確な情報を得ることが出来ず, 学校の性教育は役に立たないと感じる者が多い

(中村・佐藤, 2006)。一方女子では, 生殖との関連を意識して妊娠や中絶について重点的に教育されることから, 恐怖を感じて禁欲主義的になり, 性行為を否定的に捉えるという指摘もある(中村・佐藤, 2006)。

家庭における性教育では, 親は子どもの性に対する関心や欲求を否定しがちであり, 子どもとの間では男女関係や性に関する事柄は話題にしにくいいため, 受動的な姿勢であり, 性に関する話題に向き合うわずらわしさなど(小倉・北川, 2010)が, 家庭での性教育へのとり組みを乏しくしている(高橋, 1997)。性に関する事柄を話題にすることへの抵抗感は, 子どもに対する場合に限ったことではなく, 性愛の対象である夫婦の間においても同様であり, 一般的な会話をよくしている場合でもセックスについての会話は乏しいという現状がある(高橋, 2003)。また, 学校でどのような性教育が行われているのか分からず, 両者間の連携が不足していることが指摘されており(小倉・北川, 2010), これも家庭での性教育を難しくしている要因の1つであるといえる。

2. 「家族や生殖」における知見と課題

この領域における論文には, 家族に関するものと, 出産に関するものが含まれる。

家族に関するものでは, 近年の出生率の低下などを受け, 女性の身体観や生殖観について調査し

た田辺(2015)によると, 月経には益するところがなく, 産まないことによって自身の生殖能を疎かにしているという身体観を持っている者は, 「生殖から離れている身体」といえるような位相にあることが確認された。もし女性が産まないという選択をしても, 生殖にかかわる属性を放棄できないという自覚が女性たちに欠如しており, 様々な健康問題を引き起こしていると田辺(2015)は指摘している。そのような特徴を持つ女性の身体における生殖性や性に関する知恵は, その他の知恵と同様に上の世代から次の世代へと受け継がれる。特に, 親密さや受容といった精神的な結びつきが強い良好な母娘関係では, 性や生殖に関わる知恵が綿密に伝承されていることが分かった(竹原他, 2007)。

また, 現代の日本人のもつ母性性のイメージについての調査(石崎他, 1996)では, 母性性と女性性では回答パターンは異なっているということが分かった。第1の特徴として, 母性性の「強さ」に対して, 女性性ではその反意語である「弱さ」が挙げられており, 2つの語群には相反する内容が含まれていると考えられる。第2には, 母性性には反対の性である父性性と共通した単語があげられていたが, 女性性のみにもみられる語群には父性性や男性性と共通するものはなかった。第3には, 女性性のみにも挙げられた語群には, 外観的要素を含むものが多いのに対し, 母性性のみにも挙げられた語群では, より精神的要素が強いものが多いということが分かった(石崎他, 1996)。さらに, 母性性, 女性性, 父性性, 男性性の4つのイメージ全体を見渡すと, 母性性, 父性性, 男性性のイメージは, 共通して人間にとって向上的, 目的とすべきものであるのに対して, 女性性のイメージはむしろ人間としての成長を抑制する印象を受け, 一人の女性が常に母性性と女性性の両方の特徴を兼ね備えるのは, 本質的に難しい課題であることを示唆するものと思われる(石崎他, 1996)。

出産に関連する論文では、妊娠期や出産後の性生活について検討したものと、人工妊娠中絶で妊娠をしない・継続しない場合の決定に関してや、パートナーとの関係の変化を検討したものが含まれる。

人間の性行為は、快楽性、連帯性、生殖性という側面がある（大嶋，2016）が、妊娠期における性の態度と認識では、「愛情表現」や「コミュニケーションの手段」と認識するものは夫婦に差がなく多いが、夫の方が有意に快楽性を認識している（大井・富田・高村，2002）。これらの認識や態度の差は、性行動の欲求レベルにも影響を及ぼしており、妊婦の大半が満足する性行動欲求レベルは「キスをする」段階までとしているが、夫は「セックスをする」が約30%以上であり、「快楽性」の傾向が強い（大井他，2000）。よって、男性は、妊娠期に性に不満を抱きやすく（片岡・八重・江藤・堀内，2005），妊娠期に性的暴力などを含んだ、ドメスティック・バイオレンスにつながる可能性がある。深刻なDVを受けた経験は、ソーシャルサポートの満足度が低い、サポート量が少ない、世帯収入が低い、精神疾患の既往があるといった要因とならんで妊婦の孤独感を強める（丸山，2017）という指摘があることから注意が必要である。さらに、出産満足度が低い群は、身体的なストレス反応があることも分かっており（関塚，2005），妊娠期～出産後における性生活を包括的に捉える視点も重要であるといえる。

一方、人工妊娠中絶によって妊娠を継続しないことを決定するカップルも存在する。その決定に際しては、その時の困惑や迷いの有無、パートナーとの関係、相談者と相談内容、決定までの相談状況、十分な情報が得られたか、当事者が納得して決定しているかなどの情報を得て、アセスメントすることが重要であり（曾我部・大井・岸・早川・高村，2000），妊娠中絶後に、妊娠異常が多く生じているわけではないが、生理の異常を訴える者は多く、身体的・精神的負担が予想されるこ

となどをしっかりと伝えることも重要である（中村，1974）。また、妊娠を継続しようとしている10代女性が、中絶することを前提で関わり、母親役割を一方的に押し付けてくる医師に出会ったという報告もあり、臨床の場で偏見をなくし、柔軟に対応することが求められるはずが、実践できていない現状も明らかにされている（小川・安達・恵美須，2007）。

また、昨今の国際情勢から、難民となって日本に流入する女性たちのリプロダクティブヘルスについても注目する必要がある。「難民の女性」という立場は非常に弱く、人とつながりたいという思いからの衝動的な性行動をしてしまう可能性が高いが、偏見や誤解なくサービスが受けられる環境・医療機関は未だに十分に構築されているとはいえない（五十嵐・小黒，2014）。彼女たちのリプロダクティブヘルスを向上させるためのプログラムの改定や評価を行い、検討を重ねることが必要である（高松・小黒，2018）。

3. 「逸脱と性暴力」における知見と課題

この領域における論文には、非行や暴力、援助交際などの売春といった、逸脱した性行動について検討したものが含まれる。

男子非行少年のセクシャリティについて調査した門本・大木・卜部（1998）によると、非行少年の性的情報の入手先は先輩が多く、性的知識は低いが性行為率は高いという事が分かった。非行少年群は保守的な意識を持ち、性知識に対する自信も高いことは、三浦・小野（1992）における知見とも一致するが、先輩から性的情報を得ることが多いことは、注目に値する。性的情報接触と性犯罪行為可能性について調査した湯川・泊（1999）は、性的なメディアへの接触頻度が高いことが、性犯罪を合理化する性犯罪神話を形成するのではなく、友人や先輩との情報交換が媒介していることを明らかにした。情報交換を通して性情報が促進されることもあるが、そこで誤った情報が広ま

らないよう注意すべきである(湯川・泊, 1999)。以上から、非行少年たちは、先輩との性的情報の交換を通して、性犯罪神話を形成しやすいということが考えられ、性犯罪神話が、実際の性犯罪に結びつく可能性も指摘されており、注意が必要である(湯川・泊, 1999)。

性犯罪神話の中でも、レイプを合理化する誤った信念をレイプ神話と呼ぶ(大淵・石毛・山入端・井上, 1985)が、レイプ神話を信じている男性が多いことから、レイプ神話自体が、男性の性に何らかの重要な役割を果たしているのではないかと考えられ、また、女性の中でも特に性経験がある女性がレイプ神話を信じていることから、レイプ神話は性行動の一側面であるという指摘もできる(大淵他, 1985)。

一方で、レイプ被害者に対する大学生の態度を規定する要因について調査した小俣(2013)は、平等主義的性役割観が強い女性は、被害者に責任があるとは感じない傾向にあり、逆に平等主義的性役割観が弱い女性は、被害者に責任があると感じる傾向にあることを明らかにした。このように、平等主義志向性などの要因と影響しあって、レイプ神話が性犯罪被害者に否定的に働くこともある。

また、女子少年による殺人で最も多い嬰兒殺について検討した近藤(2008)によると、嬰兒殺を犯した女子少年は、胎児を自身の附属物のように扱う傾向が強く、そもそも父親が分からない、どうしようかと悩んでいるうちに中絶する期間が過ぎる場合が多いという。出産した直後は、周囲にばれないように、特に母親にばれたら悲しませてしまうと混乱し、その中で嬰兒殺を犯してしまうことが分かった(近藤, 2008)。

売春に関する論文では、女子青年の性的逸脱行動である援助交際について検討したものが含まれる。櫻庭他(2001)は、援助交際を「金品と引き換えに、一連の性的行動(喫茶につきあったり、デートをしたり、性行為をすること)を行うこと」と定義している。金品と引き換えに性行為を行う

という点は、従来の売春と共通しているが、性行為以外のデートなども含まれる点が特徴的である。援助交際を行っている者は、「売春はしたくない」などの罪悪感を抱く一方で、それにより得られる金銭へ執着し、安いバイトはしたくないなどと感じている(石橋・石川・月村・里見, 1997)。そういった援助交際を行う少女たちは、一般的な少女と非行少年の間に位置する不良であり、買春や性行為に対する許容度は一般的な少女と違いはないが、ナンパされてお金をもらう事などに対する許容度は高く、非行への入り口に立っているといえる(石橋他, 1997)。また、行為内容が深刻である一方で、それにより得たお金の使い道が洋服代や飲食代と他愛なく、不釣り合いであることも指摘できる(石橋他, 1997)。援助交際を行う少女たちは、学校適応が悪く、他者からほめられたい、他者より目立ちたいと思う傾向が強い(石橋他, 1997; 櫻庭他, 2001)。風俗業界で働く女性にとっても、学校生活を通して得た同輩ネットワークは強みになっていることが分かっており(上間, 2015)、学校での体験が青年期女性の性行動に大きな影響を与えていることが分かる。また、友人の援助交際経験を聞いたことのある者は、援助交際に対して、寛容的な態度を取ることも分かっており、周囲に援助交際を行っている者がおり、それを見聞きするという体験も援助交際へのハードルを下げ、促進する要因といえる(櫻庭他, 2001)。

また、援助交際体験者は、対面的な経験者集団との相互作用の機会をもたずに常習化に至る(仲野, 2010)。インターネット上の掲示板などが代替手段になりやすく、非対面的ではあるが、援助交際をめぐる様々な学習や正当化・合理化の理論的根拠に活用されるという点で、対面的な経験者集団の代替的機能を果たしているといえる(仲野, 2010)。高校生は、携帯電話を 통화よりも、インターネットツールとして用いており(古島, 2015)、インターネットは青年にとってより身近な存在に

なっており、そこから引き離すことは困難な課題である。つまり、援助交際の特徴的な集団性を踏まえた離脱研究が行われるべきである(仲野, 2010)。

一方で、買春を行う男性の意識について検討した宇井他(2008)によると、買春に許容的な意識を持つ者は、性的欲求が高く、男女平等意識が低く、ぬくもり希求が高いという特徴を有していた。さらに、買春を実際に行った経験がある者は、これらの特徴に加えて、20代30代に多く、家族との情緒的絆が低いという特徴を有していることが分かった。

これらの売買春に関わる論文に加えて、逸脱した性行動に関連して、マンガや雑誌におけるポルノグラフィについて検討したのもあげられる。メディアにおける女性表現について検討した豊田・福富・西田(1993)によると、女性の表現は乳房や生殖器などの性的器官の露出の度合いという単一の観点からのみ解釈されているのに対して、男性の表現は多次元において解釈することができた。つまり、メディアの中で、女性は性的欲求の対象として消費される傾向が強いことが分かる。またメディアに登場する男性は各年代に分散している一方で、女性は若い年代に偏っている(福富, 2001)。さらにメディアの中の性表現は、キス → ペットィング → 性交という一連の流れから切断され、男性の生理的動機を強調し、女性の動機を無視、または性行為の結果として女性が快感を得るというような表現が多い(福富, 2001)。

「逸脱と性暴力」に関わるものとして、さらにパートナー間で起こる暴力について検討した論文があげられる。配偶者やパートナー間で起こる暴力では、結婚と妊娠が結びついているとする結婚観を持つ者は、子どもを産むために仕方ないとして、相手の気が進まないのに性行為を行うなどの暴力を容認し、許容範囲が広くなりがちであると指摘されている(長谷川・別所・細谷・出口, 2005)。

配偶者間の暴力に加えて、近年では若年層の未婚のカップル間の暴力であるデートDVも問題になっている。デートDVは男性が加害者、女性が被害者という従来のドメスティック・バイオレンスとは異なり、男女とも加害者・被害者の双方を経験する加害・被害の双方向性が特徴的である(松野, 2017)。これらのデートDVに関しては、交際経験がない者の方が、また女性の方が認識しており、デートDVに対する認識の低い者は暴力だという認識がないままパートナーとの間でデートDVが繰り返されていると考えられる。さらに服従的な暴力は暴力が潜在化しやすく、パートナーからの愛情表現であると認識されやすい。そのため、交際経験のある人の認識が低かったと考えられる(松永・森脇, 2019)。

こうした行為に対する認識の誤りは、セクシュアル・ハラスメントに関連する問題でもみられる。男性はセクシュアル・ハラスメントに該当する行為を、女性に対する親しみや友愛の気持ちから生じたものであると誤った知覚をしやすい(田中, 2000)。特に、女性に敵対意識を持っている人ほど、また女性の性的魅力に期待し、淑やかさに期待しないほどセクシュアル・ハラスメントを行う可能性が高い(田中, 2000)。さらに、日本におけるハラスメントは、文脈や状況で区別され、行為水準で区別されないという問題がある(成瀬・川畑, 2016)。これは、職場の仕事としては無関連あるいは不適切とみなされる日常生活での女性の性役割を、職場での役割にまで拡大してしまう「性役割の溢れ出し」とも関連するだろう。この「性役割の溢れ出し」がセクシュアル・ハラスメントを生じさせる原因であるという指摘もある(田中, 2000)。

これらの暴力を受けた女性の看護者の性暴力に対する態度と知識について調査した片岡・堀内(2001)によると、性暴力が女性の心身に与える影響についてはよく理解されていたものの、そういった心的外傷からの回復に向けた具体的な看護

についての理解が低いということが分かった。しかし、周囲から感情面でのサポートやコミュニケーションを受けることで、いじめを受けた被害者が早期の性経験などの性的リスクを回避できることが分かっており(松永, 2014), 看護者を含めた周囲の人間が心理的なサポートを行うことは重要であろう。

4. 「恋愛」における知見と課題

この領域に含まれる論文では、異性間の恋愛について検討したものが含まれる。

現代の恋愛の諸相について雑誌記事の分析から検討した谷本(1998)によると、かつては結婚が恋愛のゴールであったが、1990年代前半からは、恋愛のプロセスについて書かれた雑誌記事や、「友達以上恋人未満が心地よい」という言説が多くなったという。また若者たちは、対外的な条件よりも主観的・個人的条件を重要視し、外の世界とのつながりを断つことで、恋愛を社会に対して閉じたものにする。こうした関係の排他性は、葛藤時にパートナー以外のサポート源を上手く活用することが出来ず、不適応を招くこともある(相馬・山内・浦, 2003)。以上から、現代の若者は恋愛においては、結果よりプロセスを重視し、成員が「シェルター」にこもるという特徴を持ち(谷本, 1998)、恋愛は間主観的なものとして認識されている(大森, 2014)。そのため、異性の友人なのか恋人なのかという関係性のラベルが重要になり(中村, 1991)、関係の進展とともに友愛的な愛よりも狂氣的な愛が高まる(松井, 1993)。このような特徴をもつ恋愛関係では、男性のコストが女性の報酬となり、女性のコストが男性の報酬になるという相互性を持つ(奥田, 1994)。愛情や奉仕の交換は相互である一方で、情報や金品は男性から女性に与えられるという特徴がある(奥田, 1994)。これらの社会的な財の交換は、性別にまつわるステレオタイプの信念であるセクシズムとも関連がある。男性では、女性に対する好意的

なセクシズムが長期的な恋愛関係に対する欲求を高め、女性に対する敵意的なセクシズムが外見的魅力と財力、内面性を重視する程度を高めていた。一方、女性では、敵意的セクシズムと短期的関係欲求、好意的セクシズムと長期的関係欲求にそれぞれ関連が認められた(阪井, 2007)。

性差は他にも、全般的な異性との相互作用に対し不安や緊張感を感じる傾向である、異性不安においてもみられる。男性では以前の自己との比較によって、女性では同年代他者との比較によって評価された親和指向の高さが、異性不安とより強く関連していることが示唆された(富重, 2000)。女性は助力欲求が強く、周囲の人間によって恋愛が影響を受ける(戸田・松井, 1985)ことから、女性の恋愛において周囲の人間は重要な役割を担っていることが分かる。また、恋愛に関する知識は権能複合体であり、専門家は1人ではない(桶川, 2016)。さらに、女性の方が愛着が強く、関係を継続させようとする近接コミットメントも高い(戸田・松井, 1985; 古村, 2014)。また、恋人とセックスをする理由にも性差がみられ、男子は、自分の性的な興味や欲求を満たすために性行為をする反面、女子は、恋人からの求めに応じて性行為をすることが多い(高坂・澤村, 2017)。

IV 考察

本研究では、青年期の性行動についての知見を概観したが、以下では性行動に関する研究の課題や展望について述べ、青年期の女性の性行動の特徴や課題についても述べる。

1. 性行動について話題にする際の抵抗

日本において総合的社会調査を行うための尺度を開発した岩井(2001)は、家族測定項目としてセックスの回数をたずねているが、これについては開発チームのなかでも意見が分かれたという。また、コンドームを購入するという場面も、性交渉と直結した性的状況の具体的な一形態として位

置つけられており（樋口・中村，2009），羞恥感情を喚起される可能性もある。このように，性に関することを話題にするということそのものや，それが性的状況に直結することから抵抗が存在することが分かる。よって，性行動に関する研究を行う際，対象者の中にもそのような抵抗を強く感じる者がいる可能性があり，教示の仕方や調査方法において十分に配慮する必要がある。

2. 性行動の持つ文化的な意味

人間の性行動は生殖目的から行為そのものが目的化し，人の「性」は生理・生物学的なものを基盤としながら，我々を動機づけ，情緒を刺激するという非生理的な面もある（日野林，2008）。そのため，娯楽としての性行動における挫折は，精神的に大きな影響を与える。「ひきこもり」の生きづらさの語りにもみる性規範について考察した伊藤（2015）では，皮膚病があることで恋愛もセックスもできないと強く思いひきこもってしまった女性や，彼女が出来たことで自信を取り戻した男性の性的挫折に関連した語りがみられる。また，脊髄の損傷によって，永続的な身体機能の障害に加え，心理・精神，社会・経済的な側面における困難さを抱える（堀田・市村，2017）と言われている脊髄損傷者は，生殖よりも，性生活そのものに希望や不安を抱えていることが指摘されている（蜂須他，1979）。脊髄損傷者が性生活を送る上では，自らの性的欲求を充足することなど，個人が性生活における目的が達成できていることに加えて，自分が第三者から性的存在として認められるのかどうかも重要な要素であることが示されている（堀田・市村，2017）。以上から，人間の性行動においては，生殖性ではなく性行動をできることそのものに意味があり，また，他者から性的な存在として認められることが重要であるといえるのではないだろうか。特に，青年期は配偶者獲得動機が高まる時期（沼崎，2017）であり，中でも性行動が活発になる大学生（張谷，2000）では，

性行動における挫折が大きな影響を持つと推察される。そのため，性的挫折を回避する介入や，挫折から回復するための介入が必要なのではないかと考える。

3. 性行動の背後に存在する性規範

性別によって性行動には様々な違いがみられたが，不倫や婚前性交などに関する性規範が，性別によって異なる影響を及ぼすことで，行動の違いがみられる可能性が考えられる。例えば，高校生性の意識について調査した劔他（2002）によると，男子は女子に比べて不倫・婚前性交などを容認する率が高く，さらに，男性の不倫・婚前性交は容認するが，女性の場合は容認できないという二重規範を持っていることが分かった。このような男子の規範意識から，性について男子は肯定的なイメージを持っている者が多いのに対し，女子は否定的なイメージを持つ者が多くなっている（劔他，2002）。男女で異なる介入を行い，それぞれの行動の改善を目指すことも重要であるが，その背後にある性規範そのものについて問いなおす必要があるだろう。

4. 性行動を男性と女性の相互作用として捉える

性行動は性に対する社会的な規範が異なる男性と女性の相互作用であることから，カップルを単位として包括的に捉える必要があるのではないだろうか。特に妊娠・出産においては，いくつかの論文ではすでに試みられている（例えば，朝澤（2013）など）が，母娘間で知恵が伝承されやすいこと（竹原・嶋根・野村・三砂，2007）などから，未だに妊娠・出産は女性のみの問題としてとらえられやすい。その理由として，女性は，成人期でも母親との結びつきが強く，アイデンティティは母親に対比して作られ，特に妊娠は母と娘の関係において重要性を帯びているということがある（勝又，2007）。これにより，男性は妊娠や出産を自分が入り込めない領域であると感じている

可能性があるのではないだろうか。しかし、自然流産によって妊娠を継続できなかったカップルでは、自然流産後に成長・成熟や、親密な関係のさらなる向上といったポジティブな変化もあれば、関係の断絶といったネガティブな変化もあることが指摘されており(竹ノ上・佐藤・辻, 2006), カップルを単位として関係性におけるポジティブ・ネガティブな変化を包括的に捉える必要がある。

5. 青年期女性の性行動の特徴と課題

以上の性行動に関する知見の考察を踏まえて、青年期女性の性行動の特徴と課題について述べる。

1つ目の特徴は、女性は性行動に対して受動的な傾向にあることである。これは、女子は、恋人からの求めに応じて性行為をすることが多い(高坂・澤村, 2017)ことや、性に対して否定的なイメージを持つ者が多い(劔他, 2002)ことから分かる。また、妊娠・出産をするのは女性のみであり、性に関連する健康問題については、男女が均等に利益を享受しているとはいえない(和田他, 2007)ことから、女性は性行動に関して受動的にならざるを得ないという可能性も指摘できる。

2つ目の特徴は、男性からの視線が、青年期女性の自己受容に大きな影響を及ぼすということである。人間の性行動では、性的な存在として他者から認められることが重要であることが分かったが、女性の身体においては、思春期における女性の身体的な変化が男性を典型とする他者からの視線や反応を引き出す、という意味で社会性を帯びており、そのことが「性的な存在」である自己の受容のあり方の性差を規定する(服部, 1981)。つまり、女性は性的自己を他者の、特に男性視線によって形成する傾向があるといえる。このことから、女性の性行動には、男性からの視線が影響を及ぼしていることが分かる。

特徴の3つ目として、男性に加えて他の女性も、女性の性行動に影響を及ぼすということがあげら

れる。女性の恋愛において周囲の人間は重要な役割を担っていること(戸田・松井(1985)など)や、妊娠・出産において母親との関わりが大きな影響を与えていること(竹原(2007)など)から、周囲の他の女性も女性の性行動に影響を及ぼしているのではないだろうか。そのため、カップルを単位として性行動を男性と女性の相互作用として捉える視点だけではなく、女性同士の相互作用が女性の性行動に与える影響も検討する必要があるのではないかと考える。

文献

- 尼崎 光洋・清水 安夫(2008). 大学生の性感染症予防に対する意識とコンドームの使用との関係——意識尺度の開発と予測性の検討——日本公衆衛生雑誌, 55, 306-317.
- 尼崎 光洋・森 和代(2011). Health Action Process Approachを用いた大学生のコンドーム使用行動の検討 健康心理学研究, 24, 9-21.
- 尼崎 光洋・森 和代・清水 安夫(2011). 性感染症の予防行動意図尺度の開発 日本健康教育学会誌, 19, 3-14.
- 朝澤 恭子(2013). 不妊治療を受けるカップルのパートナーシップ尺度の開発——信頼性と妥当性の検討——日本看護科学会誌, 33, 14-22.
- 福富 護(1992). 雑誌メディアに見られる性表現と男女描写 青年心理学研究, 4, 16-21.
- 古島 大資(2015). 高校生の性行動と携帯電話使用との関連について 日本健康医学会雑誌, 24, 130-137
- 張谷 秀章(2000). 大学生の性行動とセーフターセックスの実行に関する研究 日本健康医学会雑誌, 9, 45-50.
- 長谷川 浩一(1992). 電話相談に現れた青年の性 青年心理学研究, 4, 10-15.
- 長谷川 美香・別所 遊子・細谷 たき子・出口 洋二(2005). 地方都市における配偶者・パートナー間の暴力体験とその関連要因 日本公衆衛生雑誌 52, 411-421.
- 蜂須賀 研二・野町 昭三郎・浅葉 義一(1979). 脊髄損傷患者の性的実態調査 医療, 33, 514-517.
- 服部 百合子(1981). 性差——相互存在としての男と女——ユック舎
- 林 雄亮(2019). 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化 日本性教育協会(編)「若者の性」白書——第8回青少年の性行動全国調査報告——(pp.29-46) 小学館

- 樋口 匡貴・中村 菜々子 (2009). コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情およびその発生因の影響 社会心理学研究, 25, 61-69.
- 樋口 匡貴・中村 菜々子 (2010). コンドーム購入および使用に関する行動の変容ステージと羞恥感情との関連 心理学研究, 81, 234-239.
- 樋口 匡貴・中村 菜々子 (2010). コンドーム使用・使用交渉行動意図に及ぼす羞恥感情およびその発生因の影響 社会心理学研究, 26, 151-157.
- 日野林 俊彦 (2008). 青年と性行動——草野論文「大学生の性的自己意識, 性的リスク対処意識と性交経験との関係」への意見論文—— 青年心理学研究, 19, 105-108.
- 堀田 涼子・市村 久美子 (2017). 成人期にある脊髄損傷者の性的存在としての自己に対する意味づけ 日本看護研究学会雑誌, 40, 813-822.
- 五十嵐 ゆかり・小黒 道子 (2014). 日本における難民女性のリプロダクティブヘルスの現状 日本助産学会誌, 28, 250-259.
- 猪瀬 優理 (2010). 中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景 現代社会学研究, 23, 1-18.
- 石橋 昭良・石川 ユウ・月村 祥子・里見 有功 (1997). デートクラブ等に出入りする少女の実態と性意識 犯罪心理学研究, 35, 29-40.
- 石崎 優子・石崎 達郎・桂 戴作・織田 正昭・日暮 眞・原 節子 (1996). 母性性に関する心身医学的研究 (第1報)——現代の日本人のもつ母性性のイメージについて—— 心身医学, 36, 467-474.
- 伊藤 康貴 (2015). 「ひきこもり」と親密な関係 社会学評論, 66, 480-497.
- 岩井 紀子 (2001). 日本版 General Social Surveys (JGSS) と家族測定項目 家族社会学研究, 12, 261-270.
- 門本 泉・大木 桃代・ト部 敬康 (1998). 男子非行少年のセクシャリティ——行動・知識・意識面からの一考察—— 犯罪心理学研究, 36, 23-32.
- 片岡 弥恵子・八重 ゆかり・江藤 宏美・堀内 成子 (2005). 妊娠期におけるドメスティック・バイオレンス 日本公衆衛生雑誌, 52, 785-795.
- 片岡 弥恵子・堀内 成子 (2001). 看護者のもつ性暴力に対する態度と知識 日本助産学会誌, 15, 14-23.
- 勝又 里織・松岡 恵・関根 憲治 (2007). 人工妊娠中絶術を受けた女性の内的世界——20代前半未婚女性のデータから—— 女性心身医学, 12, 317-326.
- 剣 陽子・山本 美江子・松田 晋哉 (2002). 北九州市内の高校3校における性意識・性行動調査 日本衛生学雑誌, 56, 664-672.
- 菊沢 康子・中村 一枝・福田 公子 (1983). 家庭科教育における家族計画の教材化に関する研究(II)——女子高校生の認識の実態—— 日本教科教育学会誌, 8, 49-55.
- 小林 優子・朝倉 隆司 (2013). 女子高校生における子宮頸がん予防ワクチン接種プロセスに関する質的研究 日本健康教育学会誌, 21, 294-306.
- 近藤 日出夫 (2008). 女子少年による嬰兒殺の研究 犯罪社会学研究, 33, 157-176.
- 古村 健太郎 (2014). 恋愛関係における接近・回避コミットメント尺度の作成 パーソナリティ研究, 22, 199-212.
- 高坂 康雅・澤村 いのり (2017). 大学生が恋人とセックス(性行為)をする理由とセックス(性行為)満足度・関係満足度との関連 青年心理学研究, 29, 24-42.
- 丸山 菜穂子 (2017). 妊婦の孤独感——関連要因と母性役割の同一化およびマイナートラブルへの影響—— 日本助産学会誌, 31, 23-33.
- 松井 豊 (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松永 正樹 (2014). 女性いじめ被害者の性的リスク——周囲からのサポートの役割に焦点をあてて—— 日本コミュニケーション研究, 42, 51-78.
- 松野 真 (2017). デートDVにおける加害・被害経験タイプと加害者の特性 教育カウンセリング研究, 8, 1-11.
- 松永 明莉・森脇 智秋 (2019). 大学生のデートDVの認識と友人から相談を受けた時の対応 徳島文理大学研究紀要, 97, 31-38.
- 三浦 正子・小野 広明 (1992). 非行少年の性意識・性行動とその周辺 犯罪心理学研究, 30, 61-77.
- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領
- 村木 久美江・大東 俊一・青木 清 (2011). 小・中学校の教科用図書における性教育 心身健康科学, 7, 26-33.
- 中村 博美・佐藤 啓子 (2006). リプロダクティブ・ヘルス / ライツの視点からみた性教育 人間関係学研究, 13, 19-28.
- 中村 雅彦 (1991). 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.
- 中村 益啓 (1974). 人工妊娠中絶の調査方法に関する衛生学的研究 日本衛生学雑誌, 28, 548-573.
- 仲野 由佳理 (2010). 「援助交際」体験者の逸脱キャリア 教育社会学研究, 87, 5-24.
- 成瀬 麻夕・川畑 智子 (2016). 日本の大学におけるハラスメント関連資料から見た特徴 現代社会学研究, 29, 43-61.
- 日本性教育協会編 (2013). 「若者の性」白書——第8回青少年の性行動全国調査報告—— 小学館
- 沼崎 誠 (2017). 異性愛と社会的認知および社会的行動の性差 心理学評論, 60, 23-48.
- 小川 久貴子・安達 久美子・恵美須 文枝 (2007). 10代女性が妊娠を継続するに至った体験 日本助産学会誌, 21, 17-29.

- 小倉 由紀子・北川 真理子 (2010). 家庭での性教育における親の果たすべき役割 日本助産学会誌, 24, 333-344.
- 桶川 泰 (2016). 恋愛ハウトゥーが提供する純粋な関係性をめぐる自己知 社会学評論, 67, 2-20.
- 奥田 秀宇 (1994). 恋愛関係における社会的交換過程 実験社会心理学研究, 34, 82-91.
- 大井 けい子・富田 真理子・高村 寿子 (2002). 妊娠期の性生活——妊婦とその夫の性の認識と満足の違い—— 女性心身医学, 7, 220-225.
- 小俣 謙二 (2013). レイプ被害者に対する大学生の態度を規定する要因——性役割観とレイプに対する認知—— 犯罪心理学研究, 51, 13-27.
- 大淵 憲一・石毛 博・山入端 津由・井上 和子 (1985). レイプ神話と性犯罪 犯罪心理学研究, 23, 1-12.
- 大森 美佐 (2014). 若者たちにとって「恋愛」とは何か 家族研究年報, 39, 109-127.
- 大嶋 友香・松岡 恵・西川 浩昭 (2016). 妊婦の性生活に関する健康教育を行う助産師の意図, 行動に影響する要因 日本看護科学会誌, 36, 64-70.
- 阪井 俊文 (2007). セクシズムと恋愛特性の関連性の検討 心理学研究, 78, 390-397.
- 櫻庭 隆浩・松井 豊・福富 護・成田 健一・上瀬 由美子・宇井 美代子・菊島 充子 (2001). 女子高校生における『援助交際』の背景要因 教育心理学研究, 49, 167-174.
- 関塚 真美 (2005). 出産満足度と出産後ストレス反応の関連 日本助産学会誌, 19, 19-27.
- 曾我部 美恵子・大井 けい子・岸 恵美子・早川 有子・高村 寿子 (2000). 人工妊娠中絶を決定するまでの経緯と心理的变化 女性心身医学, 5, 190-196.
- 相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.
- 高橋 久美子 (1997). 家庭における性教育の現状と課題 日本家政学会誌, 48, 267-277.
- 高橋 久美子 (2003). 親の性意識が性教育に及ぼす影響 日本家政学会誌, 54, 59-67.
- 高松 恵美・小黑 道子 (2018). 日本在住の難民女性に対するリプロダクティブヘルス向上をめざすプログラムの改訂と評価 日本助産学会誌, 32, 37-48.
- 竹原 健二・三砂 ちづる・本田 靖 (2006). 高校生における性行動と性教育に対するニーズ 民族衛生, 72, 215-224.
- 竹原 健二・嶋根 卓也・野村 真利香・三砂 ちづる (2007). 都内女子大生における性と生殖に関する伝承と母娘関係の関連 民族衛生, 73, 60-69.
- 竹ノ上 ケイ子・佐藤 珠美・辻 恵子 (2006). 自然流産後の夫婦が感じた関係変化とその要因 日本助産学会誌, 20, 8-21.
- 田中 堅一郎 (2000). 日本語版セクシュアル・ハラスメント可能性尺度についての検討——セクシュアル・ハラスメントに関する心理学的研究—— 社会心理学研究, 16, 13-26.
- 武富 弥栄子・尾崎 岩太・山田 茂人・濱野 香苗・井上悦子・佐野 雅之・只野 寿太郎 (2003). 大学生保護者のHIV/STDに関する意識調査 日本エイズ学会誌, 5, 76-81.
- 田辺 けい子 (2015). 「生殖から離れている身体」の医療人類学的考察 日本助産学会誌, 29, 35-47.
- 谷本 奈穂 (1998). 現代的恋愛の諸相 社会学評論, 49, 286-301.
- 戸田 弘二・松井 豊 (1985). 大学生の愛着構造と異性交際 心理学研究, 56, 288-291.
- 富重 健一 (2000). 青年期における異性不安と異性対人行動の関係——異性に対する親和指向に関する他者比較・経時的比較の役割を中心に—— 社会心理学研究, 15, 189-199.
- 豊田 秀樹・福富 護・西田 智男 (1993). マスメディアにおける女性表現の単次元性——雑誌メディアにおけるマンガとグラビアの分析—— 社会心理学研究, 8, 1-8.
- 上間 陽子 (2015). 風俗業界で働く女性のネットワークと学校体験 教育社会学研究, 96, 87-108.
- 宇井 美代子・松井 豊・福富 護・成田 健一・上瀬 由美子・八城 薫 (2008). 成人男性の買春行動及び買春許容意識の規定因の検討 心理学研究, 79, 215-223.
- 山崎 浩司・木原 雅子・木原 正博 (2005). 地方A県女子高校生のコンドーム不使用に関する相互作用プロセスの研究 日本エイズ学会誌, 7, 121-130.
- 湯川 進太郎・泊 真児 (1999). 性的情報接触と性犯罪行為可能性——性犯罪神話を媒介として—— 犯罪心理学研究, 37, 15-28.